

平成 28 年度第 4 回仙台市協働まちづくり推進委員会 議事録

○日 時：平成 28 年 12 月 5 日（水）18:00～20:10

○場 所：仙台市役所本庁舎 2 階 第 2 委員会室

○出席委員：風見正三委員長、大橋雄介副委員長、小野みゆき委員、佐々木秀之委員、
庄司真希委員、其田雅美委員、高橋早苗委員、浜知美委員、本郷一司委員

○欠席委員：伊勢みゆき委員、島田福男委員

○事務局：市民局長、市民局次長兼協働まちづくり推進部長、市民協働推進課長、
地域政策課長、広聴統計課長、市民活動サポートセンター菅野副センター長、
協働推進係長、他担当職員

○次第

1 開 会

2 議 事

- (1) 仙台市市民活動サポートセンターの機能強化について
- (2) 協働の手引き・事例集について

3 その他の議題

4 閉会

○会議内容

1 開 会

[事務局（協働推進係長）]

皆様、本日はお忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。ただいまから平成28年度第4回仙台市協働まちづくり推進委員会を開催いたします。議事に入ります前に、当委員会の定足数を確認させていただきます。本日は伊勢委員、島田委員から欠席のご連絡をいただきており、11名中9名と過半数の方の出席をいただいておりますので、仙台市協働によるまちづくりの推進に関する条例施行規則第4条第2項の規定に基づき、会議は成立しておりますことをご報告申し上げます。

続きまして本日の資料の確認をさせていただきます。皆様のお手元に資料をお配りしておりますが、資料1仙台市市民活動サポートセンターの機能強化について、別紙1市民活動サポートセンター機能強化に関する意見のまとめ、参考資料1「マチノワ WEEK」について、参考資料2「サポセンこうなったらいいっちゃね会議」開催状況について、資料2協働の手引き・事例集の作成について、別紙1他自治体の手引き・事例集などのサンプルが6自治体、別紙2平成27年度市民協働事業自己評価結果です。

そのほか委員の皆様には、「マチノワ WEEK」のパンフレット、仙台こらばん、協働を成功させる手引きもご参考までにお配りしております。以上でございますが、資料の不足などはございますでしょうか。それではここからの議事進行は風見委員長にお願いいたします。よろしくお願ひいたします。

[風見委員長]

皆さん、こんばんは。大変お忙しい中、お集まりいただき、ありがとうございます。

今日の大きな課題であるサポセンの機能強化については、今、重要な時期にきておりまして、今日はサポセンの機能強化の方向性というものをしっかりとご議論いただきたいなと思っています。

この前「マチノワ WEEK」のクロージングで私も仙台市長と並びまして、いろいろお話ししました。その中でやはりまちづくり、市民協働という意味ではトップランナー的に走って来た仙台市ですが、改めてもう一度先頭に出るためには、協働のまちづくりに関する条例も改正しましたし、サポセンの改革は、私もずっと掲げてきた課題でありますし、今までの成果として、世に送り出したいと思っています。

ただこれはあくまで委員会で決めるというより、まさに市民の声を入れながらということですので、来年度、よりその市民の力を入れて、市民の力で新しい形をつくっていくようなプロセスも映像を含めて、公開していければいいのではないかと思います。

やはり同じステージに乗るというのがまず最初だと思いますから、仙台市もここ数年で条例も変えてきて、もう準備はできていると思います。あとは実際に市民の方に枠組みに参加していただき、また、庁内の融合も含めて、内も外もいろいろな融合をしていくのが

大事だと思っております。

今日の議題は 2 つあります。それでは早速、これから議事に入りたいと思います。議事録署名人は佐々木委員にお願いしたいと思います。よろしくお願ひします。まずサポセンの機能強化について、事務局のほうからご説明お願ひいたします。

2 議 事

(1) 仙台市市民活動サポートセンターの機能強化について

[事務局（市民協働推進課長）]

それでは機能強化ということで資料 1 でございます。この機能強化につきましては、本委員会やアクションチームによる検討がこれまで行われてきたところです。そういった中で、11月頭に「マチノワ WEEK」を開催しました。震災後、久しぶりの全館イベントということで、協働やその多様性、マルチパートナーシップとか、そういうものを意識したイベント、機能強化の一環のイベントでもあったところでございますので、それをまずご報告させていただきたいと思います。

そして「マチノワ WEEK」の中で「サポセンこうなったらいいいっちゃね会議」という市民の方も巻き込んでの会議もございましたので、そちらのほうも続けてご説明、ご報告申し上げたいと思います。「マチノワ WEEK」の主催者は、サポセンの指定管理者である、せんだい・みやぎ NPO センターでございますが、副センター長の菅野さんからご説明、ご報告いただきたいと思います。「いいいっちゃね会議」のほうは司会をしていただきました浜委員からご説明いただければと考えております。では最初に「マチノワ WEEK」のご報告をさせていただきます。

[事務局（市民活動サポートセンター菅野副センター長）]

皆様のお手元にある参考資料の 1 と、カラー刷りのパンフレット、あと写真を準備してきましたので、正面のスクリーンを見ていただきながら、「マチノワ WEEK」の報告をさせていただきます。

「マチノワ WEEK」の正式なイベント名は、「マチノワ WEEK まちづくりのアイデア広場「触れる」「交わる」「考える」」です。これ以降は「マチノワ WEEK」とお話しさせていただきたいと思います。

11月 3 日から 6 日までの 4 日間、サポートセンターを会場に開催しました。市民活動ですか地域活動、ソーシャルビジネスなど、今さまざまなまちづくりの取り組みがあります。そちらのアイデアをテーマとした 17 のプログラムを 4 日間日替わりで実施して、いろいろな取り組みを市民の皆さんにショーケース的に紹介する、ご覧いただくというイベントでした。多様な主体の方々が仙台のまちづくりについて考えて、意見を交わして、交流を深めるというような機会にしていただこうということで実施をいたしました。

実績としましては、ご来場いただいた方が延べ人数で 1,162 名、サポートセンターにい

らしていただきました。目標は延べ 1,000 名でしたので、皆様のおかげをもちまして、無事目標は達成ということになりました。主催はサポートセンター、指定管理者は NPO 法人せんだい・みやぎ NPO センターでございます。

そして共催としまして、たくさんの方々にご協力をいただきました。公益財団法人仙台市産業振興事業団アシ☆スタ、地域メディアネットワーク検討会、公益財団法人仙台市市民文化事業団 10-BOX、男女共同参画財団、仙台ミラソン実行委員会、東北大学、東北学院大学などさまざまな方々にご協力いただきました。

その他、仙台市のプロジェクト推進課や防災環境都市推進室、各区のまちづくり推進課、地域産業支援課など本当にいろいろな方に協力いただき、17 のプログラムを実施することができたという状況です。

当日 4 日間の様子をお配りしている資料にも貼ってあるんですけれども、スクリーンでも準備をしてまいりました。こちらは 11 月 3 日に実施しました「地域メディア公開編集会議 共感を生み、伝わるメディアをつくろう」の様子です。こちら 5 階の交流サロンを会場にして実施しました。普段はテーブルが並んでいて、団体がミーティングをしたりというようなことでお使いいただいているが、イベントスペースにして、これで 50 名超ご参加いただいている状態になります。

こちらが同じく 3 日に開催しました「“わたくしごと”に潜む、社会を動かすチカラーハジマル フクラム プロジェクトー」ということで、自分の好きなことや得意なことを地域の課題解決に役立てようとか、役立てている方をゲストにお迎えいたしまして、机をちょっと取り払ってゲストだけでなく、参加者も交流が生まれやすいようなしつらえにして開催をしました。

こちらは 11 月 5 日に開催しました「マチノワ・ラボせんだい創発する協働へ データ、リサーチ、アクション わからない未来を、みんなでワクワクに変える」ということで、地域の状況、現状をデータ化して、いろいろなまちづくりの担い手に届けて、それを活動に役立てもらうためにデータ化する取り組みをしている方々をゲストに迎えて、地下シアターを会場に、車座になって意見を言いやすい形にしつらえてあります。

こちらは「まちづくり活動団体情報交換会 おりませトーク」という 5 階を会場にしたイベントで、テーブルにまちづくりの活動を実践している方々とファシリテーターが入る形でご参加いただいて、情報交換や意見交換という交流をしていただくもので、総勢で 50 名近くはいらっしゃいました。

こちらが 11 月 5 日と 6 日に開催しました「マチノワークショップ&カフェ」です。1 階は普段はテーブルと椅子、チラシがあるというような状態ですが、広くスペースを取りまして、サポートセンターをご利用いただいている団体に、市民の方向けのワークショップを企画していただきました。市民の方がふらっと来て、立ち寄って、ちょっと体験ができるというような状態で気軽に参加できますし、普段は少し年齢層の高い方しか来ないような団体のところにも、若い方がいらっしゃったりして、世代間の交流ができたというよ

なこともありました。

また、カフェを出していただいたのですが、サポートセンターという場所なので、単なるカフェではなく、意味のあるところにお願いしようということで、震災後石巻で起業されたフレンチトーストの専門店の方に来ていただいて、ほぼ完売というようなお話を聞きました。こちらもふらりと立ち寄って何かあるなとか、コーヒーを飲みながらワークショップを楽しんでいただくというような流れができたかなというふうに思っています。

こちらが11月6日に地下シアターで開催しました「クロージングイベント」の様子です。先ほど風見先生からもありましたが、風見先生と市長にもおいでいただき、会場の壁には4日間のイベントの中で行われた、ファシリテーショングラフィックやホワイトボードにイベントの進行を書いたもの、会場の様子の写真を掲示しまして、どんなことが4日間サポートセンターで行われたのかをクロージングイベントの来場者にわかるような会場をつくりながら開催しました。会場の後方には、4日間ご参加いただいたゲストの方々に関する資料も置いて、ほかのイベントに参加できなかった方にゲストの方の情報などを提供できるような状況をつくりました。

そして3日から6日までの毎晩、その日のプログラムの最後に、地下シアターを会場に「NETWORKING TIME ヨナヨナ」という交流会を開催しました。通常のイベントプログラムですと、どうしてもそのテーマに興味関心のある方々だけが集まることになりがちなので、それを取り払い、テーマや世代、イベントなどを超えて、交流をしていただきました。非常に多くの方々にご参加いただき、11月4日には、アシ☆スタカフェトークのゲストの方々がご自分で作っていらっしゃるドーナツやスパークリングワインなどを提供していただき、ゲストの方や世代間の交流も活発に行われて、「何かこんなことやれたらいいんじゃないかな」というようなお話もちらほら生まれております。

参加者の年代としては10代から、上は80代くらいまでの方にご参加いただきました。20代から40代の世代の方が全参加者の半数ぐらいを占めております。

参加者の属性としては、市民活動団体など、サポセンの主な利用者層の方が3割ぐらい、次に個人の方々の参加が多くなっております。企業や個人事業主といった方の参加は伸び悩んだ面もございますが、普段企業でお仕事していて、参加の際は個人でという方も一定程度いらっしゃったようです。

そしてこの「マチノワ WEEK」で、サポセンに初めて来たという方が2割近くいらっしゃいました。チラシ配布による広報に加えて、マスコミや共催、ゲストの方々に発信していくなどというような広報協力や、スタッフを中心にSNSの活用、サポートセンター入口上部の看板設置、また、初めての試みとして地下鉄のイベント情報コーナーにポスターを掲示したことが、初来館の方々の多さにつながったのだと思います。

プログラムも17種類と豊富だったことについて評価が高く、複数の企画に参加した方がいらっしゃった一方で、参加したいプログラムの時間帯が重なっていたというお声も頂戴いたしました。

・総括としましては、市民活動や地域活動、ソーシャルビジネス、学生活動、復興、防災など幅広いテーマに関心のある層にご参加いただいたことによって、まちづくりに関わる人材同士が集まって交流する機会となりました。その中で新プロジェクトのアイデア交換が行われるなど、まちづくりに関わる方の関係がつくれたということや、多彩な市民力の掘り起こしと関係資本の蓄積ができたというところがございます。

そして、関係機関の連携の具体化ができました。サポートセンターでは従前から関係機関との連携を意識し、震災以降は特に意識して取り組んできましたが、この企画を実施するにあたっては幅広いテーマを取り上げるために、関係機関にご協力を頂戴しました。

この企画をきっかけに、関係機関とサポートセンターの間の関係性がさらに深まるようになったと思っています。最初はこちらから「マチノワ WEEK」への協力をお願いしましたが、その後、逆に先方から、今度こういうのがあるというようなお話をいただくなど、事業ベースの連携体制を築くきっかけになったと思っています。

そして最後に施設としての可能性です。施設の使用方法で 1 階と 5 階を今までと違った使い方を今回行いましたが、特に 1 階はワークショップやカフェで、賑やかな雰囲気が出まして、施設の外からも何かやっているなというような、賑やかな様子が感じられ、施設のポテンシャルがあることが感じられました。

参加者のアンケートからも高い評価をいただき、多くの関係者の協力による事業内容だったことに加え、スタッフの調整力や広報のデザインなど今までの蓄積が発揮できた 4 日間になったと考えております。以上でございます。

[事務局（市民協働推進課長）]

次はこの「マチノワ WEEK」の中で、委員会主催ということで行われました「サポセンこうなったらいいいっちゃね会議」について、浜委員からご説明、ご報告いただければと思います。

[浜委員]

「こうなったらいいいっちゃね会議」というのは、サポセンがもっとこうなったらいいねということを、参加した皆様に意見を出していただくという会議で、この「マチノワ WEEK」の最初の日の 11 月 3 日に開催されたものです。私は司会をさせていただいて、意見を引き出すために、佐々木委員、庄司委員、其田委員に協力していただきました。

会場は 1 階で、サポセンが変わったときのイメージをしやすいように、宮城大学の平岡研究室にパースをつくっていただいて、何例かそこに置いてもらいました。

スケジュールとしてはオープニングの後、参加者の皆さんにサポセンを実際に見ていただくということで、1 階から 5 階まで回っていただくような形を取りました。参加者は関係者も含めて 23 名です。年齢は大学生からご年配の方まで幅広い方に来ていただきました。

2 つのグループに分かれてサポセンの方から、説明をひとつひとつ丁寧にしてもらい、そ

の後 1 階に降りて、実際にいかがでしたかという意見を聞いたあとに、もっとこうなったらしいという意見を、付せんに書いていただく形を取りました。

その中で出たアイデアの中で、とても印象的だったのが、すごく素晴らしい施設なので、もっと認知度が上がればいいという意見やもっと使いやすくリニューアルしたほうがいいのではという意見も出ていました。

施設の中をよく見ると、木や雲、鳥といったデザインが要所、要所に隠れているので、そういうものも生かせないかという意見も出了しました。誰でも来ていいとなると、本当に来てほしい人が来づらくなる可能性もあるので、ターゲットを絞るべきという意見も出る一方で、もっとたくさん的人に来てもらうように、1階や2階では、カフェなど市民活動以外の利用もできるといいという意見も出されました。

今回参加された方は、普段市民活動をしている方がほとんどで、実際にサポセンを使った方が多かったと思われます。中には使っていない方もいらっしゃいましたが、大体何となくは知っているけれど、全部回ったことがないという方が多い状況でした。

長期的な視点で考えて、親子や学生に来てもらえるようになるといいのではという意見も出されました。利用者が限定されているイメージがあるので、愛称をつけると利用者層が広がるのではないか、そしてその愛称をフロアごとにつけて、もっと広く皆さんに知つてもらえばいいのではないかという意見も出されました。

次に、そのアイデアを付せんに貼っていき、それをまとめる作業をしました。その中で、市民活動という定義がなかなかわかりづらく、教えてほしいという意見も出たことから、ので、市民活動がどういうものなのか、サポセンがどういう施設なのかをパンフレットなどの広報強化、バージョンアップして、よりわかりやすく伝えるのがいいのではと思いました。

ソフト面では、若者が集まる事業をしてほしい、小学生、中学生が市民活動を知る場にしてほしい、若い人たちとの交流を増やせるスペースがほしいという意見が出されています。より人が集まりやすいように、交流会ですとか、名刺交換会の定期開催、定期的なミニコンサートも行けばいいのではという意見もありました。

先ほども「マチノワ WEEK」のご報告がありましたが、このようなオープンな企画を定期的に行えば、アピールにもなり、認知度が上がるのではないかという意見も出されています。

今ご報告させてもらったのがソフト面のこととして、この建物をハード面で考えたときに、どうやったらもっと人が入って来るかという意見もたくさん出されました。1階の部分は結構入りづらい雰囲気が出ているので、受付を別の階に移すとか、窓口に協働マスターのような相談できるようなコンシェルジュがいるといいのではないかという意見も出されました。

あとはカフェみたいなものがあれば入りやすいのではないかという意見もたくさんありました。市民団体だけではなく、買い物帰りのお母さんや学生も寄れる場になればいいの

ではという意見も出されています。

その他には、ミニステージを作り、いろいろな市民活動団体の発表の場にしてほしいという意見も出されました。そして施設全体で考えたときは、街中では無料休憩所やキッズスペース、託児所、トイレ、授乳室などのニーズが高そうなので、それをきっかけに立ち寄ったことで、後日活用につなげられるといいという意見も出されています。また、市民活動団体への寄付受付コーナーの設置という意見も出されました。

皆さんから出た意見は、本当に立地もいいですし、いい施設なので、より皆さんに知つてもらって、わかりやすくPRをして、広く市民の人に知っていただく必要があるかななどということを今回感じました。以上です。

[事務局（市民協働推進課長）]

いいっちゃね会議は2時間でしたが、何かまだまだやればやるほど、いろいろアイデアが出てきそうな感じの会議でございました。

資料1に戻りまして、いいっちゃね会議で出たアイデア等々も含めまして、アクションチーム、審議会等でいただいたご意見を整理させていただきました。サポセンの機能強化の必要性につきましては、協働の条例ができ、これまでの市民活動支援の機能に加えて、協働のまちづくり推進の拠点に位置づけられたということがあります。そのため、多様な主体による協働の拠点施設としてのあり方を検討していく必要があるところでございます。

現状としては、市民活動団体同士の交流は見られますが、異なる主体間の交流はあまり見られず、広がりに欠けている状況にあるということでこれまでご議論をしていただいたところです。前回の8月の委員会で報告した「協働まちづくり推進プラン2016」は1期3カ年の推進計画ですが、その中でサポセンに関する事業をさまざま位置づけておりまして、新しい機能を果たしていこうというところです。

活動拠点確保等に関する支援、環境の整備や人材育成、特に若者の育成に関する支援、環境整備、このあたりは大学などと連携しながらというところになります。

資料の裏面については、事業者、企業の社会貢献活動の促進に関する支援ということで、さまざまな事例の紹介や市民活動団体に関する情報提供、また企業など団体間の意見交換の場の創出にも力を入れていこうとしております。そのほか、多様な主体の交流促進に関するさまざまなソフト事業を行ったり、情報収集、発信等によるサポートもしていくことを、この推進実施計画で位置づけております。

以前にご紹介しましたが、4月以降にアンケート調査をやっておりまして、主に市民活動団体350団体ほどから回答いただきました。サポセンに求める機能として、活動拠点としての機能がほしいということに加え、異なる主体間の交流や協働の機会といったものを求める意見が多くございました。

これまで各方面からいただいたご意見をまとめたものが、別紙1の資料で、いいっ

やね会議で出たご意見等々も結構あります。

ひとつは、ニーズや課題を、認知度・視認性の向上や、施設全体の固いイメージの払しょく、恵まれた立地を生かした改善、多様な主体が集まる場所の設置、カフェスペースの設置、気づき・ヒントが得られる場、回遊性の向上、団体の活動を紹介できる場の設置、受付の改善、情報発信の強化といった、それぞれのテーマごとに分けております。右側には、解決の具体的手法に関する意見をまとめておりまして、ソフト事業とハード整備に大きく分けてございます。

それぞれこういったソフト事業をやっていく、その中でハードとしてもこういった整備が必要だろうというようなさまざまご意見、アイデア等々いただいております。

今後は、引き続き委員会、アクションチームで実施していく際の課題等も踏まえながら検討が必要と思っております。年明けには、おおよその予算の全体の配分状況等々も見えてきますので、それらを踏まえて、2月には基本的な考え方や手順、短期・中期・長期的な目標等も含めて、具体案を取りまとめたいと考えております。また、今後も市民の方から、さまざまご意見等々聞く機会も必要だろうと考えてございます。説明は以上でございます。

[風見委員長]

「マチノワ WEEK」の来場者は総勢何名ですか。

[事務局（市民協働推進課長）]

1,100名を超えます。

[風見委員長]

1,100名のうち新しく来られた方が2割ほどですか。

[事務局（市民協働推進課長）]

そのようになります。

[風見委員長]

2割を多いとするか、少ないとするかありますが、サポセンは知られている人には知られているけれど、知らない人は知らないというか。

そういう意味で、以前は条例の最初のところが市民活動を促進するというものなので、昔は新しかったのですが、今は何か限定的なイメージさえするようなところにきてるのが現状だと思います。産官学民の連携を含めて、いろいろな交流を図ればというニーズが出ていると思います。

ターゲットは絞ったり、広くしたりと両方必要だと思います。幅広くやりながら、エッジを利かした企画を立てていくということだと思うし、先ほどの浜委員の報告にもあった、

例えばミニコンサートや、交流してみんなが出会う場というものがほしいのだと思います。

あと、コンシェルジュを置くというのもやはりホスピタリティがあるところかどうかということになりますし、デジタルサイネージや温かみのある空間というのも印象に残りました。改めて最近サポセンの近くを通るときに見るので、広瀬通の交差点から車で入ると、見つけるのが難しいですよね。

ただ看板をつくったりという意味ではなく、とても上品な建築で、あまり主張していないので、少なくとも 1 階から明かりが漏れています、賑やかさがあつたりするといいと思います。平岡研究室のほうで書いていただいている CG が後ろのほうにもありますので、ご覧になつていな方は後でまたご覧いただければと思います。

ちょっとしたインテリアを変えるとか、カラーリングを変えるとか、その雰囲気を変えるだけで全然変わります。あと、知られていなければ、誰も使わない、知っている人しか使わないということになるので、長く使われている方には少し居心地が悪くなるくらい賑やかになることを想像するくらいでいいのかなと思います。

サポセンをどうしたらいいかというのを、1 月ぐらいには固めなければいけませんので、委員会として、より魅力的な説明ができるように皆さんの意見をいただきたいと思います。

ソフト・ハードいろいろあると思います。どこからでもいいと思うのですが、資料には活動拠点や人材育成、若者育成、社会貢献、交流促進、情報の収集、発信という機能があったわけですが、それ以外のものもいるのではないかとか、それをこう変えるべきだということでも結構です。もしくは今までの意見のまとめの中で共感するところでも結構ですので、少し審議に入りたいと思います。

[高橋委員]

このようにまとめていただいて、本当にいろいろ皆さん考えられているのだな、とてもいい意見だと思って見ておりました。それで私も少し考えてみたのですが、やはり委員長もおっしゃっていましたが、市民活動という名称だと、学生などからすると少しイメージがつきにくい、敷居が高いかなということがあります。市民活動はそもそも何だったんだろうかというと、やはり私の頭の中ではボランティアという言葉が一番しっくりくるんですね。

学生には、ボランティアをしてみたいけれど、どこでそれを調べてみたらいいんですかという質問をよくされます。自分で調べてと言ってみたものの、自分で「仙台 ボランティア」とネット検索したときに、宮城県のほうには行くのですが、市民活動サポートセンターには行き当たらないわけです。

何となくもったいない気がします。本来市民活動の成り手とか、中心になり得る若い人たちをどうやったらリクルートできるかといったときに、もう少しボランティアの情報ですか、そういうものもこのサポセンが扱うようにできないものかというのが、疑問に思ったところで、これはむしろ市の方針にも関わると思うのですが、そのことについて教え

ていただけたらなと思いました。

いろいろな自治体の中で、ボランティアセンターを先に立ち上げているところは、ボランティアセンターを市民活動サポートセンターという形で機能を強化しまして、その両方のセンターを一元化するような動きをしているのも結構な自治体であるようです。仙台市が目指す市民活動サポートセンターというのは、より高度な団体の協働というほうをサポートするほうにいくのか、それとも草の根的なスタートラインからも含めてサポートするような施設をお考えなのかというところをお聞かせいただけたらと思います。

[風見委員長]

それでは事務局からお願ひします。

[事務局（市民協働推進課長）]

情報発信はとても大事なところだと思います。サポセンでもホームページはもとより、ブログやネットでもいろいろ配信しているところですが、特に若者にどうアピールできるのかというところについては引き続き検討しなければいけないというところは大事なポイントのひとつかと思っております。

サポセンがどこを目指しているのかという話については、確かに仙台市にはボランティアセンターがあり、どちらかと言えば福祉系の活動へのサポートが中心というところです。また、男女共同参画という視点ではエル・パークといったところもありますし、それにそのテーマを持って、サポートしている機関や施設があります。

サポセンの立ち上げのときから考えますと、やはり分野を問わず、その垣根を越えて幅広く対象にしていく、しかもその分野を超えて、そのつながりを生み出していこうというところを目的としておりまして、そういう中でいわゆるスタートアップというか、ボランティアをしてみたいというところから、さらなるステップアップをしていくようなところまで、幅広く支援やサポートをしてきていたというところにはなるかと思います。そういった意味での市の施設としての役割分担などもしているところでございます。

[高橋委員]

一市民の立場からみれば、市民活動サポートセンターにボランティアの情報もいっぱい載っているとすると、より市民活動への最初の入り口から、どんどん活動を開いて、全体が見渡せるようになった後もそこが使えるというイメージのところがあるといつたものですから、このような発言いたしました。

例えば「東京 ボランティア」と検索すると、一番最初に「東京ボランティア・市民活動サポートセンター」が出てきたり、大阪などもそうです。つくられ方や経緯が違うとは思いますが、市民の立場からするとそういうところがもうバツと見てわかるというのは魅力的だなど、私自身は感じましたので、発言しました。以上です。

[風見委員長]

神奈川はボランティアセンターというものは社会福祉協議会というような福祉系から発生しているようで、むしろ県民全体の、いわゆる情報共有みたいなところから始まっているので、多分設立経緯によるのでしょうか。

ただ、実際にはそのあたりはつながっていますから、その意味では、今のご発言はいいんじゃないかなと思います。私としてはもっとまちづくりという広い名前で考えると、広く、むしろそういう情報のハブになっているようなところが全部揃っているほうがいいのかなと思います。

市民活動は昔はジャンルが広かったのですが、どうも何か狭く感じるのが今日の印象ですね。ある意味では市民活動がはっきりしたということですね。昔はそれがあまりなかつたから、自分のやっていることは市民活動なのかなと思って参加してきたのが、今は市民活動というのはあの人たちのやっていることねとなってしまうところがある。

神奈川と横浜というのは、宮城と仙台の関係に似ていますが、神奈川と横浜は横浜の市民活動の拠点をつくるときに、社会起業適性みたいなものに走ったんですよね。

経緯はあると思いますが、そういう仙台市内の経緯をもう一度調べていただいて、その意味でやはり包括的にしていく機会にされればいいと思います。個性はあると思いますが、発展の方向は一緒だと思います。やはり集合化することだと思います。

[小野委員]

今いろいろお話を聞いていて、私が以前、社会貢献部の立ち上げを行ったとき、社会貢献活動方針策定や自主プログラムの開発から始めましたが、そのとき、まず最初に日本NPOセンターにご相談させていただいて、その仕組みや協働のやり方など基本的なことを教えていただきました。そして、その先の具体的なプログラムは何をやっていこうか、どのNPOと一緒にやっていこうかという段階では、「東京ボランティア・市民活動センター」をご紹介いただいて、その方と具体的なプログラムをつくっていったということを思い出しました。

仙台に転勤してきてからは、最初にいろいろ調べて、せんだい・みやぎNPOセンターにご相談させていただき、NPOとの協働プログラムを実施しました。

せんだい・みやぎNPOセンターとの打ち合わせのときに、「会社の近くにサポセンというのがあるので、そちらで打ち合わせをしましょう」と言われて初めて「あ、こんな近くにこんな素敵な施設があったんだ。なら、最初からここに来ればよかったのか?」と思ったことを思い出しました。

今回このように素晴らしいイベントを実施され、1,000人を超える方がご来場されたということで、本当に関心を持っている方は非常に多いんだなと思いました。そこで多少お金がかかるかもしれません、広報戦略を積極的にやれると、ますますこの輪は広がっていくのかなという可能性を感じました。

ただそうは言っても、企業や個人事業主の参加者が少なかったとのことですので、やはり「市民活動」といわれた時点で、企業担当者としては、企業の社会貢献活動、CSR／企業の社会的責任などとは少々異なるものとして、一定の距離を感じてしまうのかなと思いました。

先ほどボランティアをイメージされるというお話がありましたが、企業の社員一人ひとりが個人的に行うボランティア活動はともかく、企業として取り組む活動となったときに、もちろん企業市民としての市民活動ではあるのですが、おそらく企業担当者のニュアンスとしては、市民活動という一言でくられてしまうと、何かちょっと違うのかなという気がします。その辺の伝え方とか、企業へのアプローチの仕方が、もう少し企業側がピンとくるものになると、企業ももっと参加しやすくなるような印象を受けました。

[風見委員長]

やっぱりハブ機能と言ってもいいし、コンシェルジュも一緒だと思いますが、どこかに行くと全体がわかるというセンターがあるべきで、仙台市はそれをどこにするのかということもあると思います。市民協働という流れの中で協働まちづくりになったわけですから、私は「マチノワ WEEK」のクロージングイベントの中でも言いましたが、協働まちづくりセンターのような名前、条例で名前が簡単に変えられないのであれば、略称を「サポセン」から「まちセン」でもいいですが、要するにそういうひとつのわかりやすい称号に変わったというのがわかって、それが市民が新しくやるきっかけとなれば、熟度のある市民が来ると思います。また、市民だけではなくて、企業の方やいろいろな方がどんどん来ていただくという意味では、ホスピタリティで来やすさをつくれるのではないかなと思います。

[大橋副委員長]

私は「マチノワ WEEK」のいいっちゃね会議に関わらせていただいたのですが、今日の話を伺って、やはりその「いいっちゃね会議」の参加者が市民活動の関係者だけだったという情報も引っかかっています。イベントをやってもこういうある程度関係者の方が集まって来るという状況があるので、イベントやつたらいいという話はあっても、私自身もそういう意見を言ったことがあったのですが、イベントだけではなかなか難しいところがあるのかなということを、率直に感じています。

私たちの団体にもたくさんボランティアがいて、ボランティアは常に募集していて、なかなか充足しないというか、不足している状況はずっと続いているのですが、私たちはいろいろなところに出向いて行って説明するんですよね。例えば大学の中で、それこそ高橋先生の授業でお時間いただいたり、活動の紹介と、ボランティアとかこういう考え方がありますよということを、結構いろいろなところで話をして、理解をしてもらって、そこから参加してくるような学生がいたりということがあります。やはりこちらから出向いて行って説明をして、説明会みたいなものを開いたのをきっかけにして参加するボランティアと

いうのが、割合で言うと一番多いわけです。

今回、サポセンにいろいろな人が関わってもらうためには、施設をどうするかという話も大事ではないとは言いませんけれども、サポセン側からいろいろなところに出向いて行って、きちんと説明をして、あるいはそこで意見を聞いて、取り入れるべきは取り入れてというサイクルを回していくということが大事かなと感じました。

それは例えば大学で学生向きにお話をすることがあるでしょうし、それこそ企業に行ってお話をするとか、そういうアウトリーチ的な取り組みというのも、今後この目的を達成していくためには有効ではないかと感じましたので、意見させていただきました。

[風見委員長]

事務局何かありますか。

[事務局（市民協働推進課長）]

待ちではなくて、外に出て行ってというようなところは大事だと思います。クロージングのイベントの中で、サポセンで待っているのではなくて、どんどん外に出て行って、いろいろアプローチしていくべきだというようなことを市長も話しておりましたし、今回の「マチノワ WEEK」についても、サポセン単体だけではできることに限りもあるだろうということで、さまざまな支援機関や、いろいろな関係者、関係機関、大学等とも連携しながら、実施しており、そういう問題意識も持っておりますので、このあたりは次年度以降のソフトの部分で事業計画に反映させていければと思っています。

[風見委員長]

ほかにございますか。

[本郷委員]

整理いただきました意見のまとめの中で、やはり認知度が上がるといいという意見があって、私のほうもご協力できなかつたところですが、当社も含めて、事前告知をもう少し早めにやっておけばよかったですと反省をしております。

私たちの事業所が泉区にあるのですが、泉区役所の方々は結構うまくご利用されていまして、泉区の行事ですと行政の方がこちらに来ていただいて、市民行事のご案内とかをされているので、その辺もぜひご活用いただければと思います。

あと私たちのほうは仙台市全域をカバーしてなかつたので、隣接しているケーブルテレビ会社様もうまく巻き込みながら、そういう周知のご協力もできればと思っております。

あともう一点、回遊性の向上というところがありましたら、以前のビーブという建物のときに同じような話がありまして、お客様を上に上げようという戦略があり、3階に受付カウンターとか旅行事業部のカウンターなどを設置していた経緯がありましたので、一応情

報としてお知らせしておきます。

[風見委員長]

告知はとても重要で、僕も随分事務局には言いました。やはりあらゆるメディアを使って、SNSも重要ですが、テレビ・ラジオ、ケーブルテレビその他、かわら版まで含めてやつていただくほうがいいと思います。浜さん、先程は報告でしたが、何かほかに補足はありますか。

[浜委員]

この委員になったときから私は市民活動と言えるどんなことをやっているんだろうと考えたときに、例えば廃品回収や、子ども会など意外と自然にやっているんだなということがわかって、そういうのを映像化したりだとか、公園にかっこいいコーヒー屋さんが来て、そこから人が集まってというようなまちづくりってかっこいいなとか、面白いなというイメージをつけるような映像ですか情報を使って、これも市民活動なんだというのをみんなにわかってもらうというのがいいのではないかなど、常々思っております。

[風見委員長]

そのとおりですね。これは私も事務局にも言いましたけど、プロモーションビデオをつくったほうが早いんですよ。今は YouTube など、いろいろなところで見れるので、文字や絵よりは映像のほうがいいですね。

さっきのまちづくりをかっこよくっていうのであれば、皆さんご存じかもしれません、グリーンバードというまちをきれいにする掃除隊がいて、かっこいいユニフォームを着ているんですよ。それで朝からみんな商店街のゴミ拾いを全部やるんですよ。それで朝出勤するときにみんなそのグリーンバードのかっこいいユニフォームを見て、ああいう人たちがまちにいるんだ、かっこいいなって言って、それで注目を浴びたので、それに企業が協賛して、そういうことを応援していることが企業のひとつのブランディングになるというまちづくりは仕掛けそのものです。

サポセンにいるだけではなくて、まちに出て行ってほしいという意味は、そのまちのいろいろな拠点がまちづくりの拠点であり、それが集約されてデータベースだったり、そこで全部集約化されて、プロモーションされてたりするのが拠点であれば、それは小さい場所でもできるわけです。そういう意味ではまち全体がそのまちづくりのいろいろな拠点になり得るわけで、先程の例のように、老朽化した公園を、単にコストダウンするとか、市民の手をうまく生かしてとかいうのではなくて、市民が本当に楽しく、まちをクリアランスしたり、メンテナンスするような仕組みをつくるというのもとってもいいし、地域愛につながると思います。

それを映像で披露してあげると、みんなプライドを持つし、そういうところに映ると嬉

しいわけですから、そういう意味で舞台をつくって上げるというのがやはり重要ではないかなと思いました。メディア関係のお二人らしい意見だったと思います。

[庄司委員]

まず「サポセンこうなつたらいいっちゃんね会議」に関してなんですかけれども、私は参加者の方々はまだそんなに市民活動にがっちり関わっているイメージはなかったです。今日報告いただいた内容もソフト事業に関しても、若干表面的な意見が多くなったなというところがありました。

今回の「サポセンいいっちゃんね会議」を決めるまで、チラシができて広報するのに、多分2週間もなかったのではないかと思います。ターゲットはすごく広い層に来てほしいという思いはあったのですが、やはり不特定多数の一般市民に来てもらうイベントであれば、チラシや広報ツールが準備できて2カ月ぐらいは必要だなということで、ここは反省点です。

今回1回目をやってみて、そんなにサポセンを使っていない方が、サポセンを1階から上までじっくり見て、どういうことに使えるのかという意見交換ができるというのは、成果があったと思います。これは本当に継続していかないと、今回の意見だけで何かを決定していくというのは難しいのかなと思います。

その中の意見で私がすごく感じたのは、市民活動とは何かというところがまだまだわからないという意見がありまして、これはやはりサポセンだけではなく、私どもが管理しているみやぎNPOプラザでも同様なんですが、ここはまだまだ伝えていく役目があるなと思いました。

それは先ほどおっしゃっていた狭い範囲の市民活動、あの人たちだけがやっているというイメージがどうしてついてしまうのかということも含めてと、あとは浜さんがおっしゃっていた、日常の廃品回収も市民活動の一部だよねというところの広いくくりと、どちらもしっかりと伝えていかないと、市民の人たちがどこに自分は関わられるのか、関わりたいのかというのを選んでもらう場をもっとつくっていかないといけないなというように実感しました。

やっぱりその市民活動というのは敷居が高いというお話をましたが、市民活動サポートセンターという名前だったときに、企業の人たちにもっと使ってほしいという仙台市の意向が何回も聞かれるのですが、先ほど小野委員がおっしゃったように、企業の方がどういう状況だったら使いたくなるのかというあたりを、企業目線でもつといろいろ意見を聞く時間をつくらないといけないのかなと思います。

あとは若者にいろいろな活動をしてほしいというのは、すごく思いますし、市民活動や地域活動、仙台市の何か地域活性に関わってほしいっていう意見はすごく私も同意しますが、やはり若者は学業と自分の生活を成り立たせていくような仕事と両立して、プラスアルファでやるというところで、単発のイベントのような形であれば関われると思うのです

が、社会課題や地域の課題に地道に取り組むのは、結構見えにくいというか、派手さがないというか、楽しく見えないかもしれないし、大変なイメージがあると思います。

最近河北の夕刊で特集されていますけれども、配食サービスが仙台市では10年以上補助が出てましたが、その金額がずっと据え置きというところで、今配食サービスをやっていける市民活動団体は担い手の高齢化や、材料費の高騰などで、事業縮小をせざるを得ないというような現実を抱えていて、今まで受けられたサービスを受けられない高齢者の方もいらっしゃるというような現実に目を向けることも、サポセンの大きな役割ではないかなと思います。サポセンだけではなく、みやぎNPOプラザもそのとおりですが、こういった施設の役割ではないかなと思っております。

[風見委員長]

市民活動が果たして本当にどこまで広がったのか、もしくは市民活動があまり広がっていないとすれば、なぜ広がらなかったのかということの問い合わせ、NPOの学会だとか、そういうところでも取り沙汰されていると思います。ただ、やはり市民活動というジャンルが、より進化する段階にも来ているのではないかと思います。

そういう意味で産官学民の連携という、我々が新条例の中でもうたっていたマルチステークホルダーパートナーシップみたいなものが本来の協働まちづくりの姿で、市民活動というのはそのひとつ、そこに向かうプロセスだったり、その中でNPOやソーシャルカンパニーなどが出てくると思いますので、そのつながりのところをつくる人などが求められているのかなと思います。

あと市民活動を媒体として、どんどん広げるほうが多いと思います。やはり企業や行政のほうが媒体は強いので、そういうことも含めて、媒体としてどうだったのかと思いました。

[佐々木委員]

この前の「マチノワWEEK」のときの一番最初の話し合いを浜さん、庄司さん、其田さんとやりましたが、広報の期間も含めて、僕はもうあれでいいと思うんですよ。去年から市民カフェなどを何回もやってきて、たとえこれが1カ月前からやって、100人になつたらそれでいいのかということではなくて、もうどこかで決めていかなければいけないと思います。

何かやりますと言って、条例もつくって、アクションチームは走っていると。そろそろこういう議論をどこかで決めていくしかないかなと実感します。もうこの議論をどこかで終息させて、決めて、きちんとアクションに移すのかということに尽きると思っていますことを感想として上げたいと思います。

そしてもうひとつ、資料の中には出てきませんが、参加者の方からの意見として、費用対効果の問題を挙げた方がおりました。ほかの自治体は人口が減少するということで、何

かしないと若者が離れていくということで、市民活動なども若者をターゲットにしてやるわけです。

仙台市はそこまでしなくとも、いい自治体かもしれません。特に別に何もしなくても、学生もいるし、ボランティアと検索すると、大学関係の内容がヒットしてきます。大学などがその機能の役割をしているので、もしかしたら仙台市が今動く、決断する理由がないのかなと思いました。サポセンの運営に年間約1億5千万円使っているのに対して年間6万人強が来ていますけれど、100万人のうち6%しか来ていないっていうことなんですね。

その辺を危機感と捉えて、どっちに舵を切るかというふうなことをそろそろ決断をしていくということが必要なのかなと思います。

[風見委員長]

政策を転換するときは、特にそういう政策評価がとても重要なので、そのあたりの数字のチェック含めて、もう一度歴史的ないろいろな経緯の評価とか、しっかり事務局のほうでご準備いただきたいと思います。その上で評価できるところと、できないところがあると思います。例えば進展していないものは、だからこそやるべき投資があるし、むしろできているからこそ、そこを攻めるというのもあるし、そのあたりのシナリオを考えていただきたいと思います。

[其田委員]

委員長から冒頭にあったとおり、予算の時期があるということもあり、私も今までの議論を踏まえて感じていることは、少し実務的な話ばかりがイメージされてしまうということです。例えばアクションチームに取り組むときの課題なども、想定して組んでいくという作業が必要なのではと思います。

もちろん意見を聴取することは、引き続きしていくということも必要だとは思うのですが、例えば予算の部分でも、短期スパンでやるのか、中長期スパンでやるのか、時期的な問題も出てくるのではないかと思っております。貴重なご意見をこのような形でまとめていただいて、それを一個一個拾い上げていく作業は、この会議の中では難しいとは思います。別なワーキンググループとしてアクションチームがありますので、ここを肉付けしていくための予算とか、例えばPRビデオ製作というのはお金がかかると思いますけれども、広報の仕方というものを工夫すると、少し広がり感が出てくるのではないかとか、そういったことを少し整理していく時期には来ているのかなと私も感じております。

[風見委員長]

現時点でもう一度その評価をしたりとか、その関わり合いというのをもう一度問い合わせる時期に来ているのだと思います。

各委員の意見を総括すると、やはりより市民に開かれた場所になるための広報戦略もあ

りますし、そのコンテンツや、内容、あり方、機能論ということで、事務局のたたき台は若干抽象的かなと思います。

この資料1は、実際の市民からの肉声だとか、今回出てきた委員会からの意見をうまく入れていただいたもので、予算折衝だけではなくて、府内のいろいろな政策調整に使っていただければと思います。

まずこの委員会として加えておきたいところなどを、別紙1のA3のページには、キーフレーズがたくさんあると思うので、これをベースにまとめるということでいいのか、皆さんのご意見をいただきたいと思います。

もし特段補足がないようであれば、別紙1のデータに網かけしてもらってもいいし、もしくはメール本文でもいいので、委員会として強調すべきものがあれば、またご意見いただいて、事務局でまとめていただいたものを、委員会の意見ということでよろしいですか。

全体としてこの意見の中で、やはりボランティア、市民活動だけではなくて、まちづくり全体の拠点ということを、どう広めていったらいいのかということで、何%を目指すというのも、別に数値目標を掲げたかどうかということではないと思うのですが、少ないと言えば少ないと思われても仕方ない数字かと思いますので、そのあたりをどう上げていくかということを、今までの戦略を踏まえて、もう一回作文をしていただければと思います。

これについてはペーパーとして何かまとめたものを流していただくということでいいですか。事務局として、これについての取りまとめは今日ここで、皆さんにご意見を言っていただけでよろしいですか。

[事務局（市民協働推進課長）]

このA3の資料に補足でも結構ですし、ほかの観点からのご意見でも結構ですので、お寄せいただいた上で、予算の全体像などが見えてきた中で、さらに具体的にどう進めていくのかといったようなまとめを、次回2月上旬ぐらいに委員会を開催しまして、ご審議いただければと考えております。

[風見委員長]

それでは今日の結果と、皆さんからいただいた意見も踏まえて、事務局でまとめていただきますが、この意見のまとめはご参加いただいた市民の声という大きいものなので、それをうまくまとめていただいて、委員会の意見とその市民の方の意見など、少し多元的にまとめて皆さんに送っていただき、またご意見いただくということで、いかがでしょうか。

それでは、今予算折衝中だと思いますので、ここまで盛り上がっているときにこれまでの形を、しっかりと可視化できるようにお願いしたいと思います。

またアクションチームには、またお手を煩わせることになると思いますが、もう一度意見の集約のようなものをお願いして、2月にはほぼ予算は決まっているはずですよね。

[事務局（市民局長）]

1月末には議案がほぼ固まり、2月に議会に提案されます。

[風見委員長]

2月に委員会を開くときには、ある程度確定した中で、我々のやるべきこともまた決まつてくるということだと思いますので、事務局はよろしくお願ひします。

これについては各委員の皆様やアクションチームの皆様にとてもご尽力いただきましたので、一度拍手を持って感謝したいと思います。それでは引き続き議事にいきたいと思います。2番目の議題が協働の手引き・事例集について、事務局のほうから説明をお願いします。

(2) 協働の手引き・事例集について

[事務局（市民協働推進課長）]

それでは資料2でございます。協働の手引きや事例集を来年度中に作成したいと考えております。手引きの現状ですが、仙台市では平成17年に市職員向けの手引きとして『仙台協働本（こらぼん）』というものを作成しまして、前期の本委員会からの答申の中では、協働のルールといったものを理解するツールとしても広く活用されてきた部分はあるが、市民に対する広がりには欠けていたのではないかというような問題提起等もなされまして、よりわかりやすくさまざまな主体間の協働の事例といったものも掲載して、協働の進め方などより実践的なものにして、広く活用されるようなものにすべきという意見をいただいております。

その答申を受けて、今年の1月に策定した協働の基本方針におきましては、手引きを市民の皆さんとの積極的な参加の下で作成して、さまざまなまちづくりの主体が、事業の実施や評価、研修などにも活用できるものを目指すとしてございます。

3番としまして、手引き・事例集の想定イメージはあくまで事務局のイメージですが、まず誰を対象にするのかというところは、市民という部分は、協働や市民活動に馴染みの薄い方を想定しております。またその活動実践者としては、市民活動団体や地域団体、企業、大学等の教育機関などを想定しております。

そして、市職員向けという分類もあると思っており、内容としては、入り口の段階からステップアップにつながるような内容をイメージしております。

そして、その形態や活用方法としては、冊子版と動画版が考えられると思っており、ホームページへの掲載や各所への配布、配信を想定しておりますが、具体的にはこれから詰めていくこととなります。裏面の事例集ですが、手引きと一緒に編集することになると想定しております。

4番目の検討体制については、サポセンのアクションチームと同様に、本委員会の中に手引き作成のアクションチームを構成して、具体的な検討を進めていきたいと考えており、

さまざまな関係の皆さんにも広くご参加をいただきながら、よりよいものをつくっていきたいと考えております。

5番目のスケジュールについては、来年の秋ごろの完成を目指したいと思っております。作成の過程も大変重要ですので、市民の皆さんの巻き込み方などによっては、もう少し遅くなってもよいのではと考えております。

次回の2月の委員会までに、アクションチームを何回か開催しながら、そういった経過も次回の委員会でご報告しつつ、年度内には骨子案を取りまとめられればと思います。より具体的な作業については、新年度からになると思っております。作成過程も情報発信して、市民の皆さんに広く情報発信していければと思っております。

検討・作成体制については、一部専門性が求められる部分は、外注とすることを考えております。

別紙1ということで、他自治体の手引き・事例集を添付しております。ここ2~3年の間につくられた、比較的新しい手引きや事例集として、事務局側で面白いなと思ったものを何点かピックアップして、皆様にも送付しているところですが、各都市さまざま工夫を凝らした冊子となっております。こういったものを含めて、今後いろいろな都市のものも参考にしながら検討を進めていければと考えております。

そして別紙2ということで、A3の横長の資料でございます。これは昨年度仙台市と各種団体がいろいろ協働事業を実施したところですが、それぞれ市側と団体側に協働の各観点から、5段階評価をしてもらった結果を取りまとめたものです。

こういった評価手法は「こらぼん」にも示されております。震災前までは毎年集計して、この審議会等にも報告をしていたところです。それから相当時間が経ちましたことから、今度新しく手引きを作成していくということもあり、改めて6月から7月にかけて、試行的に実施したものです。

この設問は10項目ほどありますが、これは「こらぼん」の評価項目を参考に各観点から10項目に絞って実施したところでして、このグラフの左側の縁が市側、右側の青色が協働の相手方の評価となっております。右下のグラフの問1から問10のスコア平均値を見ていただきますと、市の自己評価平均が5段階評価で4.47、協働相手側が4.52と総じて高いスコア、よくできたということになっております。

右上3番の設問ごとのスコアの平均値を双方比較しますと、全体的な傾向に大きな差はないものの、その中でも情報の共有と目的達成、情報発信というところの差が比較的大きく、その取り組みに対する認識のほか、選択肢については「はい」や「どちらかと言えばはい」といったような、この5段階の選択肢になっており、その捉え方にもギャップがあったのではと推測しております。

それと振り返りと情報発信については、双方ともほかの設問と比較して、スコア値が低い傾向にあるというところです。ともに重要なポイントでもあることから、今後そういう点はしっかりと取り組む必要があると考えておりますし、そのためにサポートも必要と認

識しております。

そして、事業の目的を共有できましたかというところでは、目的共有まではよかったですものの、実際の目標の達成度や、結果の満足度はやや低くなっていくような傾向があり、実施過程で何らかの障害があったのではないかなどと推測されます。そのほか、全体的にスコアが高い水準にあるということで、引き続きこのようないく形で評価実施していくのであれば、先ほど申し上げました選択肢設定のあり方なども工夫が必要なのかもしれません。

そのほか、自由意見欄の主な意見を掲載しておりますが、事業ごとに担当部局と団体側で共有し、今後のあり方の参考としたところです。説明は以上となります。

[風見委員長]

これまで長い経緯でここまでつくってきたわけですが、各地域の先進例を見ながら、せっかく刷新するので、新しいものにできればと思います。

あと、どういうものをつくるかによって、告知だけではなくて、デザインだとか、手に取ったときの理解度というのが大事なので、いつもどおりのものをつくる必要は全くないと思います。ご専門の方も多いと思いでの、いろいろご意見いただければと思います。

特に映像版をぜひ作成していただきたいなと私も思います。予算の関係もあって、すごいショートムービーかもしれませんけど。これについてご意見いただきたいと思います。

[大橋副委員長]

自己評価結果についての意見が中心なんですが、まず感想として、市の評価と協働相手方の評価が似通った傾向になっていて、結構意外でした。ギャップがあるほうが普通かなと思ったのですが、何でこんなに似通っているのかなと率直に思いました。

この傾向を見ていて2つ気になったのですが、1つはやはり経年で見ていかないと、なかなか意味合いが捉えにくいかと思ったので、今後継続的に経年で比較していくことが必要だと感じました。

もう1点はこの結果を、各協働の担当部局のほうにフィードバックされているのかなというところが気になりました。結果をフィードバックして、何か必要であればそれぞれで改善策を取っていくことが大事だと思います。

[風見委員長]

2点とも大変するどい指摘ですが、事務局からは何かありますか。

[事務局（市民協働推進課長）]

今回の結果が来年度どのように生かされて、その後の評価につながっていくのかというあたりは、経年で見ていかなければいけないと思いました。担当課へのフィードバックについては、この照会は基本的に担当課を通じて関係団体とやり取りしていますので、担当

課のほうでは相手方がこういうことを思っていたんだなとか、それに基づいて市側としてはこういうこと考えているというようなやり取りがあったものと考えております。そういった形で評価しただけではなくて、次のアクションにつなげていくことがとても大切だと思っております。

[風見委員長]

本当に同じようなカープになっていますが、こういうものなんですかね。それで瞬間にその年がどうだったのかということではなく、やはりその構造を見ながら、モニタリングしてするものだと思うので、特に府内のシェアリングなども進めさせていただきたいと思います。

[佐々木委員]

協働の手引きと事例集について、これから議論を深めていくものだと思うのですが、資料の想定イメージの部分を見ていて思ったところです。僕自身はこの事例として長岡の「きょうどう。」がいいのではないかと思っており、情報提供したというのもありますが、協働の概念を定義していくとか、難しいところから入っていくのではなくて、具体的にわかりやすいようなイメージで、その人の言葉で語りかけるようなものがやはり必要ではないかと思います。

もし行政研修など必要であれば、場合によっては2つに分けて、1つは教科書みたいなもので、1つで、それは協働の概念などについて載せるものとして、やはり今必要なのは、どういうものが市民活動なんだとか、どういうものが協働なんだということを、具体的な事例と人の顔が見られる形で、示していくことではないかなと思います。

そういった意味では、この市民協働事業も非常に高評価を得ているということなので、これを見る化するという作業が求められていますし、それをしないと、データで素晴らしいと言うだけではなくて、どのようなモデル、仕組みが生まれているかというようなところが評価されるべきだと思いますので、今後の議論に入る前にあたって、共有していきたいなと思いました。

[風見委員長]

情報提供もいただいたありがとうございました。特に長岡のものは割合評判で、これは感性に訴えるというか、実際にどんな喜びがあつたり、どんなことを指しているのかというのはやはり文章ではなくて、こういう人々のプロフィールから始まって、彼らが何をしているのかということだけでも伝わるんです。

映像でもそうですよね。個人的なプロフィールになったときにやはり自分が共感するとか、親近感を持つとか。大体ドキュメンタリーというのは、突然人に焦点を当てる手法を取りますが、それはやはり自分に一番シンパシーを感じるきっかけになるという

ことだと思いますので、とてもいい例を選んでいただいていると思います。単に伝えるというより、感じていただくというか、そういうものになればいいと思います。

[佐々木委員]

一つ言い忘ましたが、かつて出したこの「仙台協働本」というのはトップランナーであったと思うんですね。そういうものを多分参考にしながら、長岡なども含めて今、全国にこういう協働というものが広がっていったのですが、サポートセンターもまた新しい概念を仙台から生み出していくという意味では、「こらぼん」が、なかなか今使われていないという現状だということであれば、タイトルも焼き直しするなどここもフルモデルチェンジして、サポートセンターの1階は創発というイメージでやるということであれば、場合によっては違った概念をつくっていくこともありますとあります。

[風見委員長]

10年を迎えているわけですから、そういう意味では大胆なモデルチェンジをしてもいいように思います。いろいろないいものが出てきていますから、そういうものがベースになり出てきていて、そのベースになっているのは「こらぼん」だと思いますけれど、それをまた世の中に出していくためには、ダイナミックなモデルチェンジをしてもいいのかなと私も思います。

[浜委員]

私はやはり長岡のほうが見やすいなという、視覚でまず手に取ってもらえるというのが一番大事で、「あ、こんな方がいるんだ」って思いながら、やはり若い方にどんどん参加してもらうためには、まずこのパンフレットのように、視覚で訴えていくということが大事だと思うので、しかも仙台にはそういう方々がたくさんいると思うので、そのようにつくれれば楽しいなと思って見ていました。

[風見委員長]

やっぱり人の物語というか人生というか、そういうものを通じて、皆さん共感すると思うので、事例集というよりはプロフィールシートみたいなものから入って、ある意味では最初にどんなきっかけをつくって、調べさせるというか。

最初に美辞麗句が書いてあるよりも、大体こういうふうになると体系を書いてしまうので、もっと具体的なものから入って、ぜひ実践的に使われる本をつくりたいですね。

[佐々木委員]

そういう意味ではこういう事例集をつくるプロセスも、市民と協働していくというこ

とはすごく大事だと思うんですね。例えば今仙台サポセンを見ていると、一番人が来ている行事としては市民ライター講座がありますよね。ライターの方々は卒業すると、「はい、さよなら」という状態だと思うんです。

そういう方々にも少し書くことをやってもらえば、まちづくりも広がっていくし、実際この「協働」って何だとか、そういうことは多分教科書を読んでもわからないと思うので、そういうことを実態的にアクティブに学んでいただく機会にもつながっていくのではないかかなということを、付け加えさせていただきます。

[風見委員長]

プロセスとして市民をどう入れていくかというのはとても大事ですし、協働の四コマ漫画のようなフレーズもとてもいいと思いますし、そういういろいろなメディアやアートを入れていくといいと思います。

[大橋副委員長]

現状の「こらばん」をもう一度拝見していて感じたのですが、これはもしかすると行政職員を主なターゲットにして、行政職員にどうやってこの協働の意識を広めていくかというところが強かったのかなと、特にあとがきを見て思いました。

今回協働本の改訂の方向性として、わかりやすく、視覚的な情報を中心にしてつくり直すということも大事だと思っている一方で、その行政の職員の中にその協働というものがどういうものなのかとか、ちゃんと浸透していくような要素はやっぱり大事だなと、改めて感じたので、どちらの面も必要かなと感じました。

[風見委員長]

とてもいい指摘をいただきました。多分最初協働の話があったときには、市民もそうですけれど、府内も全くわからないというか、今でも本当にどこまで浸透したかといえば、市民局としてはまだまだだと考えておられると思いますけど、引き続き、府内の雰囲気づくりはとても大事なので、確かにそういう両方の面があるのかなと思います。

特に職員の勉強会というか、そういうものをいろいろベースにしながら、こういうのもつくられてきたんだと思いますし、その流れは消してはいけないと思うので、外に出していく部分と、中で協働というものをさらにエンジンとしてつくり上げていくものと、両方いるかもしれませんね。

引き続き、協働まちづくりを支える部局内のいろいろなプラットフォームをつくったり、人材育成というか、教育をしていくというか、シェアリングをしていくと同時に、それがまちに展開して初めて協働なので、それがあちこちに起きるためにはどうしたらいいかと言うと、そこをこの長岡は見ていると思うんですよ。やっぱり地域で活躍する人、こういう人がしっかりと活躍してくれているということに対する賛辞というか、愛というか、そ

いうものを感じますよね。

一人ひとりのそういうところが輝いていて、これがある意味でゴールなんですよね。そういう人たちが息づいているということが。そういう意味ではいろいろなものをつくっても、完成ではないわけで、市民の人たちがどんなにいきいきと、まちづくりなり、その協働ということを、日々感じながら生きていけるのかという、そこがゴールだと思います。

ただ今、大橋委員がおっしゃっていただいたように、やっぱり府内のことも忘れてはならないなというふうに、いいアドバイスだったと思います。

【庄司委員】

やっぱり、人の顔や表情がわかるものというのはすごくいいと思います。仙台市でこれから作成するにあたっては、つくり終わった後にどのような使い方をするのかというのも、イメージしながらつくるのが重要ではないかなと思います。

【風見委員長】

使い方ですね。確かにそこの部分からむしろ設計しないといけないですね。それも事務局のほうでしっかりと書き留めていただきたいと思います。

それではこれについてはこれからまた長いというか、短いというか、策定会議に入りますので、先ほどスケジュールでお示しいただいたように、年度内にある程度形が見えるところまでいかなければいけないですね。そういう意味ではこれもそんなに時間はないですね。

委員会としてはこれに関するアクションチームをつくりたいと思っておりまして、今お声がけをしておりますが、まだ調整中ということですので、今日は委員長の預かりにさせていただいて、できればこういう協働本というか、協働のこういうものをつくるときに、こういう人材がいいなとかということがあれば、お声がけというか、お誘いいただいて、この仲間に入っていただくような方の推薦も含めて、私でもいいですし、事務局のほうでもいいですので、思いつく方がいたらお声がけいただきたいと思います。

やはり拡散していくという意味では、新しい方が入っていただくことがまた広がるひとつの目となり、耳となり、口となり、手となりということになると思いますので、今日はアクションチームの発表はできないんですが、ぜひ推薦いただければというふうに思います。

両議題を含めて何かございますか。

【佐々木委員】

今「仙台協働本」の「はじめに」を追っかけていたのですが、これも素晴らしい、今でも使える、生きている概念だと思います。ただ、この本をつくったときに、協働を理解から実践へと強力に移行していくための手引きを一日も早くつくり上げることを優先したと。

ただ、それはまだまだ不十分だと。そして今後は協働の成功事例、失敗事例などから、よりよい協働を実現していくためのノウハウを蓄積していきたいというようなことを書いてありますし、これを書いた当時の加藤さんであるとか、当時の仙台市の職員の方だと思うのですが、こここの最後の部分、この残されたメッセージというものは非常に重要なのかなと思いました。そういうことを長く続けてきたこの市民協働の中に重く受け止めて、この部分をやれたらいいなと、そういうメンバーが集まって、またこの本をバージョンアップしていったらいいのではないかなということを最後に思いましたので、ちょっと付け加えさせていただきます。

[風見委員長]

そのとおりですね。この時期、これに挑んだということのすばらしさと、特に亡くなられてしまいました加藤哲夫さんのまさに思想の下に、いろいろ仙台市が一生懸命つくられた、頑張ってこられた方々もまだ見ておられると思います。そういう意味ではただ、今までの加藤さんの思想もそうですけど、その思想を生かすということはつくったものをそのまま生かすことではないと思いますよね。

それを目指したところの、そここの不十分さが、まだまだやりたかったことがたくさんあるはずなので、その部分を行間を読み取りながら、その先に進むというのは、次を継ぐ者の役割だと思います。

市民協働というのがより一般的な名詞になってきたときに、どういう本があるべきかということで、その部分は次回までまた各委員に考えていただいて、わかりやすく外に広がるもの、ある程度実践が出てきていれば、実践というものを広く広めながら、より加速させていくと同時に、府内はどうだというのを厳しい目で見ていただいて、府内の促進ということでは、まだまだこういうことが息づいていかなくてはいけないというのもあるでしょうし、そのあたりどうデザインするか、そういう意味で残す、変えるというようなものを含めて、もっと根本的にどういうやり方があるのかということで考えていただければと思います。

自由に議論して決めていくということが重要だと私は思います。ただ、精神をしっかりと受け継ぐというのは重要だと思いますので、そんなふうに宿題を出させていただきたいと思います。

[本郷委員]

事例集をつくるときに地域の方々がお出になられると思うのですが、ぜひ動画とかと連携したようなものをつくっていただけるといいのではないかと思います。ARという拡張現実という、今そういうソフトがありまして、こういった画像を読み込むと、タブレット上でその人が語りかけるような、そういうことがあります。情報提供までです。

[風見委員長]

特によろしければ、せっかくですので次長、局長から一言。

[事務局（市民局次長兼協働まちづくり推進部長）]

最初にアクションチームの皆さん中心にマチノワ WEEK を最後まで導いてくださいまして、本当にありがとうございました。まずお礼を申し上げたいと思います。

それから今日の最初の議題のサポセンの機能強化についてということでしたけれども、先ほどこの委員会が始まる前に、委員長と若干お話をさせていただいたのですが、協働条例ができてから、もう1年以上経っているんだねというようなことでした。

その協働条例は、もともとあった市民公益活動の促進に関する条例を、全面改正して、今の協働の推進の条例という形になったわけですが、その中でサポセンという部分は名称も変えずにきているんですね。サポセンの名称は変えなかったのですが、条例改正によって、これまでの市民活動プラス協働の拠点にもなり得る施設として考えていかなければならぬというようなことにはなっています。

このタイミングで改めて、市民活動というのをもっと大事によく考えて、それを市民の皆さんに広めていかなくてはいけないんだなということを、強く今日は感じました。

ただ、その広め方という点では最初の条例ができたときと違って、今はさまざまな手法があるので、そういったところを活用していくというのが、私たち事務局に与えられた宿題なのかなということも思いました。

さらにこのサポセンというのは市民活動をしている人だけではなくて、市民活動をしようとする人も使えますよということをきっちり条例で言っていますので、そういった意味ではその市民活動をしようとする人に、いかにサポセンを使っていただくかということを考え、サポセンの機能強化を考えていくときには交流する場というところに着目していくというのはありなのかなと思ったところです。

あともうひとつのお題として、協働の手引きと事例集だったわけですが、今日の皆さんの議論を聞いて、サポセンの機能強化の話と非常に密接に関わっていることだなと思いました。活動している方々、協働されている方々を見せていくという意味で、非常に有効のツールになるのかなと思いました。

私的には市民活動だけではなくて、地域活動と連携していかなくてはいけないかなというところもありまして、そういう意味では今日提供させていただいた札幌の事例では、そういったところに着目して手引きをつくられています。

あとは地域活動というところで考えたときに、別に地域政策課という部署があり、そこで震災後、町内会の皆様が非常に力を発揮したというような事例集をつくっています。そういうのも委員会の皆様に見ていただくというのもひとつなのかなということを感じました。

あとは協働の相手方ということで考えていったときに、仙台の場合はやはり若者が多い

まちであるとか、転勤族が多いまちであるとか、そういう特性があるかと思うんですね。そのような視点から考えていくときには、仙台市で東西線が開業して明日でちょうど1年になるわけですが、東西線まちづくりということでもって、人材育成のプログラムも今やっています。WEプロジェクトというのですが、もともとWEのWが西で、Eが東ということで、東西線なので東と西をうまくつないでというところのWEです。

そこでも人材育成をやっていますので、そういったところから育ってきている市民活動のいろいろなチームもあるので、そういったところをうまく融合させていくと、尚広い視点からの議論となり、でサポセンの機能強化にまた戻っていくのかなということを、今日いろいろ感じながら、皆さんのお話を聞かせていただいたところです。今日は本当にありがとうございました。

[風見委員長]

先程の地域政策課の事例集の話を聞きして、そういうところの連携もとても重要だと思います。ちょうど政策的にもそのような意向が出てきたというのは、とても嬉しく思っています。局長も一言。

[事務局（市民局長）]

今日はいつも以上に熱い議論を重ねていただいている。「マチノワ WEEK」も皆さんのご協力で、非常にすばらしい4日間で大成功と思っているところでございます。これも皆さんに感謝したいところでございます。

そしてサポセンの機能強化、最初にボランティアのお話から始まって、やはり市民活動は確かに特殊な人たちだというイメージが抜け切っていないのかなという気はします。

お話にも出ましたとおり、ほんのちょっとの取り組み、子ども会や廃品回収、ごみ拾いなど、すべて市民活動というようになかなか認識していただいている部分もあるのかと思いますので、とりあえず何か役に立ちたいのだけど、何を取り組んでいいかわからない若者などが入りやすくて、そこにどんな活動している団体があるか紹介できるようなところから出発をし、さらには既に活動しているけれど、なかなかいろいろな悩みがあったりする皆さん同士の情報交換もできるような場所であり、さらにより高いレベルの創発という表現なのかもしれませんけれど、そんな高いレベルの協働に発展させたい人も、それぞれの立場でそれが入りやすくて、利活用しやすいサポセンにしていければという思いを強くしたところでございます。

それをどんな形で、ハード・ソフト両面でつくっていくのかということが、これから約1~2ヶ月の勝負なのかなと思っているところです。

前にもお話ししたかもしれませんが、雨漏りしてケガをする施設の改修も大事ですが、これも大事だという時代に実は入っていますので、なかなか予算確保は大変ですが、まさに条例を改正して1年以上経って、これからどのように進むのかというお話をときに、こうい

った変えていく部分が必要だという予算の折衝になろうかと思っております。

それから先ほどボランティアも含めて、福祉だけではなく、いろいろな魅力づくりとか、地域の活性化とかそういう取り組みをしている団体もいっぱいあります。

町内会の運営も高齢化や、なり手不足で大変だというお話がございます。子育ての支援も必要だとか、いろいろな需要を地域側では市民センターなどを中心にいろいろな人が活動していますので、市民センター側からサポセンをどんどんPRしていただくというのもありますかなと思っています。

もちろんそのSNSとか、とりあえずこんな活動がありますというのを、映像で紹介する一番わかりやすいのですが、すべてやるのに予算もなかなか難しい場合、こういうアクセスをすると、その団体のSNSに入れますという紹介リストはどんどん分厚くしていくのかなという気はしています。サポセンの機能はそういう形で、この時代ですから、最初にできた頃からだいぶ認知度上げる工夫はできるのかなと思っているところです。

それから手引き・事例集は、町内会の活動の事例集という昨年つくったものがありますが、取り組んでいる人たちの熱いコメントだったり、笑顔だったり、そういう写真をつくりました。そういうものも長岡市のものに少し似ているのかなという気はします。職員も経験したことのない人のほうが圧倒的に多いので、こういう取り組みをこの職場に行くとやっている事例があるんだなとか、そこから入って自分の今の仕事でも、もしかするところいう人たちと何かやれそうだなというように持つていければというのが、私がずっと思っている点ですので、そのためのノウハウや、よりステップアップするやり方だとか、いろいろな意見いただきましたので、参考にさせていただいて進めていければと思うところでございます。寒いところ、大変今日はありがとうございます。寒いときに熱い議論をしていただいたので、それでどうにか温まることができたと思いますが、ありがとうございます。

[風見委員長]

僕が過ごしていた横浜市の企画調整局長の田村明さんという方がいらっしゃるのですが、田村さんがよく言っていました。

ひらがなのまちづくりという言葉をつくった人ですが、やはり市民というものが育成されない限りはまちづくりというのはできないと。一番大事に思っていたのは人づくりの話なので、人ができる初めてのづくりもまちづくりもいくわけで、そういう意味でやはり人づくりというのは一番大きいのかなと思います。

それだけに長岡の協働本があるように、人に焦点が当たっているんですね。やはり人というものを生み出せたということが、財産なのだと思います。それを生み出すための仕組みというものが、やっぱり我々はつくらなければいけない立場にあると思うんですね。こういう委員会や、行政、先生も、部局というのはその仕組みやプラットフォームをつくるために知恵を出さなければいけない。

我々の成果は人ですね。どういう人が生まれてくるかということだと思うので、政策をつくることではなくて、政策から生まれる人、人が我々のやはり証しだと思いました。

そういう意味では今、局長、次長とも、とても熱い答弁で、委員会の締めに大変いい言葉をいただいたのではないかなと思います。今日とてもよかったですなと思うのは、この円卓のようにつながったのはいつからですか。

[事務局（市民局長）]

1メートルぐらい距離があったと思います。

[風見委員長]

そうですよね。そこに隙間があって、僕はそれはいけないからまずはつなげて、オンザテーブルに座らない限りは議論はできない。何か引いたところに、もう気持ちが出てしましますから。

膝をつめて議論するというのはとても大事なので、とても審議会らしい審議会になってよかったです。ここまで今日の議論は以上で大体終わりたいと思います。ここまで議論ありがとうございました。

3 その他

[風見委員長]

事務局からその他事項は特にないことですので、以上で議事を終わりたいと思います。局長からもございましたように、大変寒くなっていますので、帰り安全運転でお帰りいただければと思います。今日も熱い議論ありがとうございました。

これから正念場ですので、特に事務局にはお手数をかけますけれど、皆さんもぜひ応援していただいて、条例改正からもう1年経ちますので、ひとつのこういう形に見えるもので、そこから生まれて来るいろいろな人々、新しい担い手の人たちに脚光を浴びるような本をつくって、映像をつくり、広めていなければ必ずそういう人たちが次の時代をつくってくれると思います。今日はありがとうございました。以上で終わります。

4 閉会

[事務局（協働推進係長）]

それでは、以上をもちまして平成28年度第4回仙台市協働まちづくり推進委員会を閉会いたします。本日も長時間にわたり、ご審議いただきまして、ありがとうございました。
一了一

〈議事録署名人〉

[委員長]

風見正三

[署名人]

佐々木秀之